

東日本大震災15年 復興・創生シンポジウム「他人事から自分事へー東日本大震災から15年、迫りくる巨大地震に私ができることー」を開催しました（2026/2/13）

テーマ：東日本大震災 15 年
会場：イイノホール（東京都千代田区）
URL：<https://www.ggi.tohoku.ac.jp/2025/12/12/2089/>

2026 年 2 月 13 日（金）、東北大学災害科学国際研究所および東北大学グリーン未来創造機構、読売新聞社、一般財団法人国土技術研究センター、一般財団法人 3.11 伝承ロード推進機構の共催で、東日本大震災 15 年 復興・創生シンポジウム「他人事から自分事へー東日本大震災から 15 年、迫りくる巨大地震に私ができることー」を開催しました。本シンポジウムは、過去、現在、未来の3つを柱に、東日本大震災から 15 年となる 2026 年 3 月に向けて、将来の震災への備えを強化し減災社会を構築するために、東日本大震災とそれ以降の災害を振り返り、防災への課題として、【自分事化】や伝承、新しい取組を考える企画です。

当日は、湯上浩雄東北大学副学長、山口寿一読売新聞グループ本社代表取締役社長による開会挨拶ではじまりました。

第一部では、東日本大震災を振り返り、現在の復旧・復興および防災での現状と課題を振り返りました。御厨貴東京大学先端科学技術研究センターフェローからは震災発生直後からの復興構想会議の設立と詳細な経緯について、徳山日出男国土技術研究センター理事長からは震災当時の東北地方整備局の対応からリスクマネジメントや自分事化への課題について、基調講演がありました。

第二部は、古橋季良復興庁審議官から複合災害としての東日本大震災、特に原子力災害の被災地となった福島県の現状と課題について、今村文彦東北大学副学長から東日本大震災の被害状況と、これに対して東北大学が取り組んできた災害科学国際研究所やグリーン未来創造機構の活動や新たな災害科学コースの設置について、栗山進一当研究所所長からは医療の面から現在も続く東日本大震災の健康課題や行動変容に向けて何をすべきかについての報告がされました。また、企業プレゼンテーションとして松崎哲士郎仙台ターミナルビル株式会社代表取締役社長より、集団移転跡地の利活用事業として展開した JR フルーツパーク仙台あらはまの 10 年間の活動について報告がありました。

第三部では、学生らと共に、自分事化の現状、取組状況、未来への課題と解決にむけたパネルディスカッションがおこなわれました。当研究所の福島洋准教授（陸域地震学・火山学研究分野）のコーディネートにより、東北大学、福島大学、武蔵野大学、高知大学でボランティア活動に参加している学生たちと、日本留学時に東日本大震災を経験し、その後災害・防災の研究者となったゲルスタ ユリア准教授（災害メモリー学分野）が、それぞれの体験をもとに、東日本大震災から 15 年にあたって考えていることや、自分事化についての課題や解決のアイデアを議論しました。

最後に、西井英正一般社団法人仙台経済同友会代表幹事が 1978 年宮城県沖地震、阪神・淡路大震災、東日本大震災の経験と、日々地震が起きることを考えておくことの重要性を、閉会の辞として述べました。

当日は約 400 人の参加者があり、会場はほぼ満席でした。本シンポジウムから一人ひとりが新たなヒントを得て、東日本大震災の経験を自分事化することで、減災社会の構築を加速させる契機となることを願っています。パネルディスカッション参加の 4 大学からは、一緒に活動している学生にも多数参加いただき、終了後に今回の学びや気づき、さらには今後の活動目標などを話し合いました。なお、本シンポジウムは読売新聞紙面でも後日（3 月 11 日朝刊予定）、特集が組まれることになっています。

文責：蝦名裕一（災害文化アーカイブ研究分野）
（次頁へつづく）



湯上副学長の開会挨拶



山口社長の開会挨拶



御厨フェローの講演



徳山理事長の講演



古橋審議官の報告



今村副学長の報告



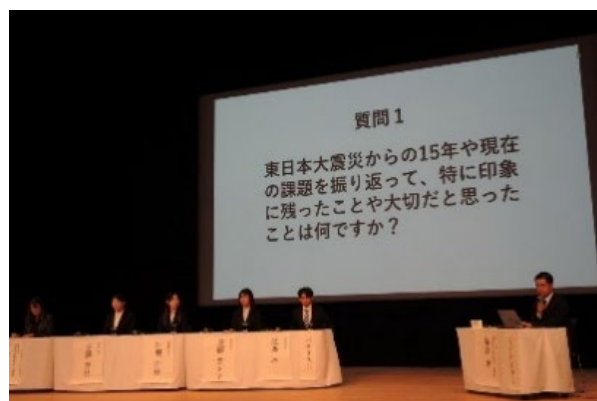
栗山所長の報告



松崎社長のプレゼンテーション



西井代表幹事の閉会挨拶



パネルディスカッションの様子（1）



パネルディスカッションの様子（2）



パネルディスカッションの様子（3）